

一人の首切りも許さない  
— 電通闘争にまなぶ —

問答無用の見せしめ

配転を絶対許さない

雇用形態選択にあたって『配転があるかも知れない』ということは妻には話をしておりましたが、いきなりの5月1日の広域配転には私も『NTTに残った者を許さない』という会社の本質を痛感しました。

妻の怒りは会社への怒りと、見通しの甘い私への怒りも含まれていたかも知れません。しかし、どこころんでも30%の賃金ダウンでは生活できないのは明白です。

しかし、四国に残された家族は大変でした。妻は、私の母の入所している

特別養護老人ホームに週一回、洗濯物の交換ついでに母の様子を見に行っていました。実は母には神戸に単身赴任していることは言っていないでした。ショックで何かあつては、という配慮からです。『息子は?』という母の問いかけに、妻は『仕事が忙しいんよ』というウソをそのたびに言っていました。

た『まなぶの仲間』 No.6より。これは2002年4月から実施された「11万人首切り合理化」攻撃の中

で、怒り、悩み、苦しんできたNTT労働者の生の声です。

その内容は「50歳以上の職員は一旦退職し再雇用、賃金は地場産業に相応しい賃金ということ、15%の減(地域による格差)、退職再雇用に応じないものは職種を問わず全国配転させる」というものでした。

電通闘争とはなにか

1970年当時の電電公社では、公社の二大目標だった「申し込んだらすぐ付く電話(積滞の解消)」「全国どこ

## ◆みんなの学習講座



自動変換置き換え装置が開発されて、電話交換台は次第に消えていきました。花形だった電話交換手は合理化の嵐にさらされていきます

でもすぐ繋がる電話（全国自動ダイヤル即時化）の実現に向けて膨大な設備投資が行われる一方で、電話交換手の中に頸肩腕（けいけんわん）症候群という職業病が若い交換手を中心に蔓延しておりました。

### 元全電通千葉県支部

#### 市原書記長に聞く

司会 当時の電電公社（現 NTT）の様子をお聞かせください。

市原 女性労働者の権利締め付けに攻撃を集中していました。特に攻撃が集中したのは、「生理休暇取得」問題でした。当時の取得率は10%弱で、「当たり前のこと」が、当たり前になっていない状態。女性労働者の大半は電話交換手でした。全電通本部は公社と「平和協定」を締結していたため、千葉県支部大会は、攻撃を跳ね除けるには職場組織の強化以外にないと組織方針を固めたのです。

司会 生理休暇取得の闘いは、全分会へ拡がりをみせましたよね。

市原 2年後には10%弱から70%に、ゼロから大多数が1日取得になり、3日間へと拡大していきました。職場に「反合理化闘争」の体制が整ったことで、「頸肩腕症候群」の闘いにつなが

っていきました。

### 電電当局と全電通本部が

#### 一体となり攻撃

74年、全電通千葉県支部では、当時の県支部役員であった大木委員長、市原書記長を不正選挙で排除しました。また、76年には全電通岐阜大会へ激励に行った職場活動家に対して「大会破壊妨害者、全電通の方針を守らない」と調査委員会を設置し組合員権利停止処分を行い、職場の末端職制を使い徹底的に組合役員から活動家を排除してきました。

### 全電通茨城県支部

#### 常陸太田分会の闘い

司会 常陸太田分会の中心的な担い手として活動してきたFさんとUさんの二人にお聞きしました。66年に常陸太田電報電話局に入社し、68年から分会執行委員、県支部常任委員長を担

つて来たFさんは、入社当時のことを次のように語っています。

**F II** 入社した年に太田局と日立局の電話交換職場を統合して1カ所にするという提案があり、日立局は東北の工業地帯で電電公社（以後、公社）も組合も日立局を残すという方針でした。常陸太田分会は連日、夜遅くまで職場集会を行い、子どもを背負った女性組合員も多く参加していました。組合上部機関から役員を呼んで「太田局を残してもらわなかったら働き続けられない」と訴えていました。組合員と役員の徹底的な議論が物凄く熱気でした。この統廃合問題は、太田局が残ることになりました。この時の経験から組合員の中に「自分たちが一生懸命にやれば、既定方針でも変えられることが出来る」という確信が持てました。

### 分会役員選挙に勝利

**F II** 分会執行部は、組合員に信頼され

るようになっていきます。75年の全電通全国大会を契機に全電通本部は、職場闘争から制度・政策要求（参加と介入）へと方向を大きく転換させ、それに反対する全国の活動家を「全電通の方針に従わない」と徹底して排除して来ました。この攻撃は公社と一体のもので公社は、活動家以外の職員を一泊二日で研修に行かせ、職制を使い夜の宴会で分会批判をする。県支部役員は、各職場の「有志」を集め料亭で分会役員選挙対策を行う。という徹底ぶりでした。

**F・U II** さらに、右派幹部は全国大会に行つて合理化反対のビラを配布したことを「大会を妨害した」と宣伝し、分会役員選挙で配った選挙承認ビラを、反組織行為として組合員権利停止処分を行い、実質的に分会活動をさせなくしました。

### 仲間の思いを大切にしながら

**U II** 「朝、職場に着いたとたんに気分が悪くなる。自分の人生をこんな思いで過こしたくない」という言葉を残して多くの組合員が職場を去っていきました。そういう中にもあつても、F氏や私は、仲間の気持ちを聞きながら分会や県支部に要望書を出し、会社にも職場要求を出し、組合の代議員選挙に立候補するなど精一杯取り組んできました。

### 電電公社民営化から「11万人

#### 首切り合理化」反対闘争へ

世界では「小さな政府・強い国家」を標榜する、イギリス・サッチャー、アメリカ・レーガン、日本では中曽根政権が誕生し、86年「国鉄民営分割法案」は強行採決され、89年総評は解散し「連合」が結成され、初代連合会長には全電通労組（現NTT労組）委員長の上原章が就任しました。

## ◆みんなの学習講座



茨城支部のストライキ集会にはユニオンネット埼玉、茨城ユニオン、内原地区労女性会議、全労連全国一般労組法律事務所支部、不安定労組などの組合員が支援に集まった

82年7月臨調基本答申（第3次答申）が出され、それは、「電電公社を五年以内に中央会社と複数の地方会社に再編する」。「当面は、政府100%の株式を持つ特殊会社に移行する」。「民営化の目的は有効な競争条件の整備」というものでした。そして答申通

り85年4月電電公社は民営化されNTTになりました。新たな長距離通信事業者（NCC）が参入を開始し、電気通信事業は大競争時代へ突入したのです。01年7月までNTTの全株式の54%を放出し、95年まで新規事業者は118社に及びました。

95年、日経連は「新時代の日本の経営方針」を打ち出し、「日本の労働者の賃金は高すぎる。年収400万円まで下げる」方針に基づいて01年4月、NTTは「11万人首切り合理化計画」を発表し、翌年から実施したのです。さらに成果主義賃金の導入で、明確な基準もないままに社員をA〜Dのランク付け差別賃金を導入して来ました。

### N 関労茨城支部結成へ

NA 〓 NTT労組は組合に値しないと、一人の首切りも許さない”のスロガンの下、東西に日本NTT関連合

同労働組合が結成されました。茨城でも活発な議論が展開される中、NTT労組に残った仲間、会社や組合の差別・選別や排除攻撃が強まる中でもめげず、末端の職場組合の班長などを担い、組合の民主化を求め毎年組合代議員に立候補して闘ってきました。一方

で「OS会社を選択せざるを得なかった悔しさから、もう後悔はしなくな」と東日本NTT関連合同労働組合（N関労）茨城支部を4人の同期と共に結成しました。NTT資本の妨害にもめげず、門前ビラ配布や団体交渉も経験しました。初団体交渉の時は、NTT社員なのにも関わらず構内への車の駐車を職制の妨害で認められず、交渉時には会社の交渉委員から「金品をたかる、どこの馬の骨かもわからない」と罵倒されたことは今でも鮮明に覚えております。

毎年の春闘ストライキや突入集会には大勢の支援者が早朝から水戸のNT

T門前に集まり、時限ストを整然と闘って来ました。一番励まされたのは職場内でスト模様を見聞きしていた仲間から終了後に貰った温かい声援とNTT労組に残った仲間が、年休を取って応援に来てくれたことでした。

## 家族ぐるみで

### 首切り撤回を闘ったNTT

私がNTTで働いていたのは113センターという電話の故障と、当時NTTが主力で販売していたフレッツというインターネット回線のサービス故障受付でした。03年2月に113へ入り、NTT・T・Mの子会社で臨時社員として雇用されました。

当初から正社員と業務があまり変わらない上、賃金は不当に低いのに、仕事量、責任は全く同じという所に違和感がありました。07年4月からは臨時雇用から派遣社員となり、113センターへ派遣されるといいう仕組みでし

た。NTT労組という組合は入社当初から知っていましたが、私のような非正規には全く無縁の存在であるということは、機関紙（NTT労組新聞）を見ればすぐ分かりました。そんな中113業務は千葉に集約されていくことになり、私の雇用も危ういと感じてきました。

### 一枚のビラの存在

そんな中、私の気持ちを代弁してくれるようなビラに出会ったのです。朝NTTビルの正門でビラを配っている人がいたのです。決してNTT労組の機関紙のようにカラフルでも丈夫な紙でもありませんでしたが、会社への要求や怒りが書かれており、驚きました。

### 父は国労だった

このビラを父親に見せた所、一回電話してみろと言われました。

私の父親は元国鉄労働組合員でした。

「提案制度に応募しない」「SLの切符売りに協力しない」などの理由で、1年間「人材活用センター」に入れられ、自転車の整備をやったりしたが、ほとんど仕事は与えられなかったと言いながら「今思えば良い思い出」と笑う、反骨の父親です。

N関労の方に何度か会ううちに「うちの組合に入らない」と言われましたが、非正規である私が労働組合に入れるのかという驚きがありました。

そして11年3月11日の東日本大震災を経験し、課長から朝礼で1日当たり7500円の災害手当が支給されると言われましたが、後になって派遣社員は対象外と言われました。これももう自分がN関労の組合員であるという事を公表して会社と団体交渉をしろかなと思いました。派遣社員は派遣元の会社が雇用主のためテルウエルジョブサポートと主に団体交渉をすることになりました。会社は団体交渉に

## ◆みんなの学習講座



2013年11月25日、113センター前で、NUさんの解雇撤回を求める座り込み行動が、県内外の大勢の支援者とともに行われた

は応じましたが、113職場が千葉に集約された後私たちの仕事を探すという誠意は、全く感じられませんでした。団体交渉に参加した父が、相手の交渉委員を怒鳴りつけたのが印象的でした。

13年11月に113を雇い止めにされました。北風の吹き始めた25日、解雇撤回の一日門前座り込み行動を大勢の支援者とともに闘いました。お掃除のおばちゃんが「頑張つて」と声をかけてくれたり、窓から身を乗り出して、「座り込みつてあんな風にやるんだね!」と声を上げてくれた非正規の労働者がいたことは後で知りました。その一つひとつの言葉に、私と一緒に座り込んでくれた父はどれだけ励まされたことか。

いま考えれば私一人ではできなかった事ばかりでした。「社会問題として重く考え労働組合への挑戦状だ」と言葉をかけてくれた市原芳樹さん。カンパ金や激励の手紙を頂いた多くの皆さん。座り込みのために撤布を送って下さった徳島の三好市職労の皆さん。NTT労組役員に恫喝されながらも私の座り込みに参加してくれたNTT労組の仲間たち。今年の2月に惜しまれつ

つも亡くなった、労働大学まなぶ友の会茨城県協会長の海野貢さん。内原地区労の組合員の方々。そして私と苦楽を共にして来たN関労茨城支部の皆さん等々。私が組合に入らなければ決して出会うことはなかった人達です。私以外の悩める労働者達と違った点は、この人達と怒りを共有し共闘できたことです。最初の出会いからすでに10年が過ぎました。この年月は私の人生の中で密度の濃い10年間だと思っています。

最後に私の経験が生かされ、本当の意味で労働組合が職場のセーフティネットとしてよみがえることを願って止みません。

次回9月号は、「組織綱領草案」(58年総評第10回総会に提起)をテキストに、職場生産点での闘いを基本とした労働運動の階級的強化を目指した運動に学びます。